

## 秋ソバ「みやざきおおつぶ」のN施肥法

黒木 博・牧 慧・鈴木喜代志 (宮崎県総合農業試験場)

Hiroshi KUROKI, Satoshi MAKI and Kiyoshi SUZUKI : Nitrogen Application Method for Autumn Buckwheat "MIYAZAKIOOTUBU"

近年、水田利用再編対策の推進に伴い、転作作物として秋ソバの栽培が増加してきた。しかし、転換畑における栽培法が確立しておらず、収量は全般に低く安定していない。

そこで、宮崎大学農学部で育成され、1982年に品種登録された4倍体秋ソバの新品種「みやざきおおつぶ」を用いて、転換畑における安定多収を旨として、N施肥法について検討した。

### 1. 試験方法

1983年から1985年に、Nの基肥量(0, 2, 4, 6 kg/10a)と、分施肥(着蕾期・開花期のN追肥, 2 kg/10a)について、宮崎総合農試験場内の細粒灰色低地土転換畑で検討した。3ヵ年を通して、播種期は9月上旬、収穫期は11月中旬～下旬である。

### 2. 結果および考察

1) 基肥の効果 N肥料の全量基肥区(2~6kg/10a)は、施用量が多いほど莖長が長く、葉色も生育末期まで緑が濃かった。増量区(4, 6 kg/10a)は分枝数や花房数が増加し、標準区(2 kg/10a)より10~20%増収した。しかし、施用量が多いほど、倒伏が著しく茎がからみ合うため、収穫作業に支障を来した。

2) 分施の効果 分施肥区では、基肥としてN 2, 4 kg/10a施用し、播種後約4週間の着蕾期と、約6週間の開花期にN追肥を行った。着蕾期追肥の施用は、全量基肥区と同じく分枝数や花房数の増加により、約25%増収した。開花期追肥の施用は、生育への影響は小さいが、花房の着粒数増により、約30%増収した。両区とも、全量基肥区に比べ倒伏は少なかった。

なお、分施の効果は、1983年のように降雨の多い年に大きく、降雨の少ない年にはやや小さかった。

作物体のN吸収量は、第1表に示すように、分施肥区が全量基肥区に比べて多く、N利用率も高かった。

早霜を想定した早い時期の収穫(11月上旬)では、第2表の1985年のa当たり子実重の( )内に示すように着蕾期の追肥では、追肥をしなない場合に比べて約30%増収したが、開花期の追肥では、その効果はほとんど認められなかった。

以上のことから、粘質な細粒灰色低地土転換畑においては、基肥として2, 4 kg/10a施用し、追肥としては着蕾期の9月下旬～開花期の10月上旬に2 kg/10a施用する分施肥法が、倒伏も少なく多収が得られた。

第1表 作物体のN吸収量

区名	N吸収量 (kg/a)				N利用率 (%)
	1983年	1984年	1985年	平均	
0-0-0	0.26	0.52	0.20	0.33	-
2-0-0	0.33	0.62	0.28	0.41	40
4-0-0	0.36	0.65	0.33	0.45	30
2-2-0	0.41	0.73	0.37	0.50	43
2-0-2	0.44	0.79	0.43	0.55	55
6-0-0	0.41	0.79	0.44	0.55	37
2-2-2		0.84	0.51	0.68	58
4-0-2		0.80	0.49	0.65	53

第2表 生育・収量

区名	1983年			1984年			1985年			倒伏の程度
	莖長 (cm)	株当たり分枝数	子実重 (kg/a)	莖長 (cm)	株当たり分枝数	子実重 (kg/a)	莖長 (cm)	株当たり分枝数	子実重 (kg/a)	
0-0-0	57	0.7	8.3	73	1.8	10.1	45	1.0	6.7(4.9)	無
2-0-0	63	0.8	10.0	82	2.0	11.7	52	1.4	9.4(6.7)	無~少
4-0-0	66	0.9	10.6	85	2.2	12.7	62	1.9	12.2(9.0)	中
2-2-0	67	1.5	13.5	85	2.4	13.0	56	2.2	12.5(8.7)	少
2-0-2	62	0.9	14.0	83	2.1	13.6	56	1.3	12.1(6.9)	無~少
6-0-0	68	1.2	12.0	93	2.4	14.3	73	2.3	14.6(10.3)	多
2-2-2				84	2.5	15.3	57	2.0	14.7(9.4)	少
4-0-2				87	2.1	14.7	68	2.0	15.2(9.3)	中

注) 1985年子実重の欄の( )内は、早霜を想定した11月上旬の収穫